

## 大学における実践的ジェンダー学習の方法と意義 ——5年間にわたるジェンダー・ワークショップの省察から

*The Methodology and Significance of Gender Education at University:  
Reflections on Five Years of Practical Gender Workshops*

### はじめに

2014年にグローバル・エデュケーション・センター（以下 GEC）に全学共通副専攻「ジェンダー研究」が開設されたことを契機に、副専攻をコーディネーターするジェンダー研究所からの提案で、副専攻の全体活動として、学部生・院生によるジェンダー・ワークショップの企画・運営が始まった。この取組みは、本副専攻の受講生や、ジェンダー、セクシュアリティに関心のある学部生・院生を中心にジェンダー・ワークショップ実行委員会（以下、実行委員会）を組織し、ジェンダーやセクシュアリティをテーマとしたワークショップを企画し運営するものである。

本稿の執筆者である私たち、矢内と安野は、2014年度の開始当初、それぞれ博士課程と修士課程の大学院生という立場で、実行委員会の立ち上げと運営、ワークショップの企画・運営を行った。現在も矢内は講師（任期付）、安野はジェンダー研究所のリサーチ・アシスタント（RA）と立場は変わったが、この活動に関わっている。私たちが担っている役割は、それぞれに異なっているものの、コーディネーター・チームを築きながらこの実行委員会の運営の支援を行っている。私たちは、男らしさや、女らしさ、性の多様性を考えるだけではなくて、大学教育や研究の場における知の創出の在り方を問うこともジェンダーを学ぶ意味として捉え、コーディネーターとして支援を続けている。

本稿では、実行委員会が毎年活動の終わりにまとめている『活動報告書』(2014～2017 年)<sup>1</sup>と 2018 年度春学期の活動をもとに、実行委員の学生たち自身が、ジェンダー・ワークショップの準備のための話し合いを重ねる中で、メンバー間の関係性を育み合い、新たなジェンダー学習の方法を探究し試行してきたプロセスを跡づける。それにより、大学において実践的なジェンダー学習を行う意義を明らかにする。

## 1. ジェンダー・ワークショップの目的

「はじめに」で述べたように、ジェンダー・ワークショップは、2014 年度秋学期から GEC 設置全学副専攻「ジェンダー研究」の全体活動であり、同副専攻の運営を行う早稲田大学ジェンダー研究所の活動として取り組まれている。

ジェンダー・ワークショップの企画・運営にあたっては、毎年実行委員会が発足し、その構成メンバーは、ジェンダー研究の受講生である学部生や、ジェンダーを研究する学部生や大学院生のほかに、ジェンダー研究所所長・村田晶子、同研究所の研究員である文学学術院・講師（任期付）矢内琴江、同研究所の RA である安野直がコーディネーターとして参加している。実行委員会のメンバーは、毎年春学期の終わりごろから、教員が中心になって関心のありそうな学生に働きかけ、前年度のワークショップの参加者にも声かけがなされて集まる。そして、秋学期の初めに実行委員会が発足する。こうして集まった学部生・院生には、TA として実行委員会への協力を得てきた。なお、2014 年度の実行委員会には、学部生・院生の外に、村田晶子教授が受け入れた新入職員 3 名も研修として参加していた。このように組織されてきた実行委員会は、コーディネーター以外のメンバーが毎年入れ替わっていた。なお、2018 年度の実行委

---

<sup>1</sup> 『活動報告書』のタイトルは、毎年、若干違いがあるものの、本稿では『活動報告書』と統一する。なお、『活動報告書』からの引用などの出典を示す場合には、タイトルは記載せず、年度のみを示した。

員会は、前年度の活動を継続して行うことになったため、メンバーのほとんどが前年度からの継続で、新たなメンバーとして修士1年の院生1名と学部1年生の1名を迎えた。こうした実行委員会のあり方については後述する。

この実行委員会の主な活動は、主に次の3つである。

- ①ジェンダー・ワークショップの企画と運営
- ②ジェンダー研究所定例研究会での活動報告
- ③活動報告書の作成

この他にも、2016年度は東京ランドテーブルで実践報告やポスター発表を行ったり<sup>2</sup>、ジェンダー研究所主催国際シンポジウムのプレ企画として発表を行ったり<sup>3</sup>、2018年度は早稲田大学比較法研究所とジェンダー研究所共催「逃げ恥大分析」のポスター・セッションに実行委員会として参加しポスター発表を行ったりした<sup>4</sup>。

上記で示したそれぞれの活動の概要を述べる。①ジェンダー・ワークショップの企画と運営のために、実行委員会は、多くの場合、週に1回集まって話し合いを重ね準備を行い、当日の運営(会場設営からファシリテーションも含む)を行っている。②ジェンダー研究所定例研究会での活動報告は、例年3月頃に開催される定例研究会で、その年の活動を実行委員が報告する。③活動報告書

---

<sup>2</sup> 「実践し省察するコミュニティ 実践研究東京ラウンドテーブル」(2016年12月11日 9時～14時40分 於：明治大学)に参加し、大学外の人たちに自分たちの取組みを説明し、聞いてもらうことで、自分たちの取組みをふり返り、整理し直すために参加した。それによって、様々な意見や考えに出会い、自分たちの目的や問題意識を確認することになった。

<sup>3</sup> 2016年12月17日 10時30分～12時 プレ企画：学生企画ワークショップ「私たちの「ダイバーシティ・マップ」ー学生の視点から見直す早稲田」於：大隈小講堂。

<sup>4</sup> 2018年6月28日 16時半～19時 於：早稲田キャンパス9号館5階第1会議室。

は、その年の活動終了後に実行委員会でふり返しを行い、話し合いを重ねながら、報告書を作成する。この報告書には、準備過程での話し合いから、ワークショップ当日に話し合われたこと、さらに実行委員一人ひとりが活動を通して得た気づきなどを記録している。

続いて、これまで実施してきたジェンダー・ワークショップについて紹介する。

- 2014 年度 学生参加型ワークショップ
  - 第1回「ポスター・セッション」(2014年11月21日開催)
  - 第2回「フォト・ウォーキング」(2014年12月16日開催)
  - 第3回「学生ミーティングージェンダーの視点からプロジェクトづくり」(2015年1月23日開催)
- 2015 年度 学生・大学院生参加のワークショップ
  - 第1回「ポスター・セッション」(2015年10月30日開催)
  - 第2回「テーマ・トーク／フリー・トーク」(2016年1月22日開催)
- 2016 年度 ダイバーシティ・マップづくり
  - 第1回目 フォト・ウォーキング (2016年10月24日開催)
  - 第2回目 フォト・ウォーキング (2016年10月25日開催)
  - 第3回目「私たちのダイバーシティ・マップー学生の視点から見直す早稲田 フォト・ウォーキング」(2016年11月22日開催)
- 2017 年度 何!?カフェ
  - 第1回 早稲田キャンパス (2018年1月12日開催)
  - 第2回 戸山キャンパス (2018年1月16日開催)
  - 第3回 理工キャンパス (2018年1月23日開催)
  - 第4回 所沢キャンパス (2018年1月24日開催)

実行委員会は、その構成員が毎年入れ替わっており、企画されるワークショ

ップの内容も毎年変化し続けている。しかし、この活動が大切にしてきたことは、その表現の仕方は少しずつ異なりながらも、この 5 年間一貫してきたと言える。まずは初年度の報告書を見てみたい。この活動が重視していることを次のように記している。

この企画で特に大切にしてきたことは、学生たちの対話の場を作り、そして、ジェンダーやセクシュアル・マイノリティの視点を通して、自分たちが日々学び・生活している大学や学問をとらえ直し、自分たちの言葉で、自分たちに必要な大学のあり方や、大学における学びのあり方を、発信することだった。その背景には、ジェンダーを副専攻や、それ以外の科目で学んできた、今回の企画に参加していた院生たち自身が、今回の企画を考えていく中で、ジェンダーに関心のある学生と出会う機会がなく、一人で学んできたこと、大学の中で学生の立場から発言する機会がなかったこと、といった経験が共有されてきたことである。<sup>5</sup>

当時、博士課程と修士課程の学生だった筆者らが、自らの学部時代におけるジェンダー研究の経験をふり返り、ジェンダーやセクシュアリティを学ぶ学生の孤立化や、発言の場の欠如を大学におけるジェンダー研究・教育の課題として捉えた。この課題をふまえて、2014 年度の活動の目的は、次の 3 点に設定された。

- ①学生たち自身が、自分たちの取組（学内外の活動、研究活動）を共有する
- ②自分たちが生活している大学の中のジェンダーの問題を明らかにし合う

---

<sup>5</sup> 矢内琴江「1. 実施概要」、『2014 年度』、3 頁。

③学生たち自身が実感している学内のジェンダーの課題、どのような大学で学びたいか、大学で何を学びたいか、を発信する<sup>6</sup>

この3点は、その後もジェンダー・ワークショップの活動の開の中で一貫した目的である。

## 2. 活動報告書の分析

実行委員会では毎年『活動報告書』をまとめ、発行している。その報告書の目的は村田晶子が述べるように、ワークショップの「実施の経過と成果を報告するものである」<sup>7</sup>。したがって、この報告書は単なる結果の報告ではなく、実施の「経過」を記録することに主眼がある。実行委員会では「ワークショップの目的や、教育的意味を、実行委員会どうしで確認し合いながら企画運営」<sup>8</sup>をおこなっており、そうした試行錯誤の軌跡を書き留めることに重きが置かれている。というのも、ジェンダー・ワークショップは、当日だけで完結するものではなく、準備や話し合いそのものが、ジェンダー学習を創造するプロセスであるからだ。実行委員会にとって、「成果」は、ワークショップの参加者数や満足度といった数値的な結果だけを意味しない。ジェンダー学習の実現という意味において、どのような議論をしたのか、どのような人間関係を形成してきたのか、どのような認識の変化を経験したのかといった点に重きを置いている。

では、上記で述べた目的に沿った報告書をつくるために、どのような過程がふまれたのだろうか。まず2014年度から2016年度編集の手順について述べる。活動報告書は、ワークショップの活動を終えた後に、振り返りをおこない、その際に、なにを大事にしてきたのか、なにを学んだのか、ジェンダーに関して

---

<sup>6</sup> 同上。

<sup>7</sup> 村田晶子「はじめに」、『2014年度』、1頁。

<sup>8</sup> 矢内「1. 実施概要」、『2014年度』、3頁。

何に気づいたかを話し合った。その振り返りをもとに、構成や盛り込むべき内容について相談した。その構成案をもとに、実行委員全員で分担して執筆した。その後矢内、安野で原稿を集め、体裁を整えた。各自が分担した箇所については、全員で共有し、記述や議論が正確に反映されているかなど、意見交換をおこなった。とりわけ、ワークショップへのかかわり方や感想について記した箇所には、実行委員それぞれが、いかなる立場・姿勢・心情で、ワークショップに関与したかが表われており、重点的に意見交換をおこなった。その際に、コーディネーターとして原稿に一方的な変更を加えることはせず、なぜこの表現としたのか、どのような意図で執筆したのかという書き手の意志を尊重し、また個人の経験を報告書に載せてもよいか、といった対話を重視した。公的な文章としてふさわしい内容や質、文体となっているか、書き手の実践の事実が記述に反映されているかという観点から文章を検討したが、各自の意見を無理にすり合わせて統一することなどはおこなわなかった。というのも、その人自身が実践をどのように捉えてきたかを重視したためだ。

2017 年度については、基本的な手順は上記と変わらないが、より学生が中心となって報告書作成に取り組んだ。たとえば、報告書作成の過程で学生が自主的に SNS を通した電話会議を組織し、話し合いながら、互いの執筆担当部分を書き進めた。

以上のように、この報告書は、コーディネーターや教員の指導によって作成されたものではなく、実行委員会での話し合いを重ねて共同で作成されたものである。

こうした過程を踏まえて作成された報告書は、年度によって多少の差はあるが、おおむね「ワークショップの実施概要」、「ワークショップへの関わり」、「資料編」から構成されている。なお、2017 年度は「何カフェを通して、大事にしたこと」という項目が追加されている。以下では、各項目の内容について説明する。

「ワークショップの実施概要」の特徴は次の 2 点である。

1 点目は、実施日や場所、企画内容といった基本情報に加え、実施にいたる経緯や話し合いの過程を詳述した点である。具体的には、開催時期や場所の設定、参加者の想定、参加呼びかけの方法について議論のプロセスを丁寧に書くことにより、今後の活動の材料となることを期待している。たとえば、2014 年度第 1 回ワークショップでは開催の日時を金曜の夕方とした理由を「学生も授業がなく参加しやすいのではないか」<sup>9</sup>や「金曜日 5 時限目に副専攻科目『ジェンダーを考える』の授業があり、多くの学生の参加を見込んだ」<sup>10</sup>と記されている。ここには、「学生主体」のワークショップにおいて、どの時間帯であれば学生が参加しやすいか話し合った様子がうかがえる。また、参加者の設定に関しても、以下のように記されている。

また、「このような形式のワークショップは、一見すると、ジェンダーへの関心が学生間でも必ずしも広まっていない本学において、ハードルが高いいようにも見える。一部の関心の高い学生の参加が多くなり、ジェンダーについてまだよく知らないという学生が参加した場合、グループ・ディスカッションで話し合いに参加できないのではないか」という不安が、実行委員の中から出された。そこで、少しでも関心のある学生でも一緒に話し合うことの出来る場である、ということのを大事にすることにして、チラシの表面の吹き出しに、こうした学生も参加できることが伝わる言葉を入れてはどうか、という提案が実行委員の中から出され、「ジェンダーって言葉、よく聞けど、いまいちピンとこない…」というセリフを入れることにした。<sup>11</sup>

ここでは、ジェンダーに関する知識や理解にばらつきのある学生が、いかに

---

<sup>9</sup> 矢内「1. 実施概要」、『2014 年度』、4 頁。

<sup>10</sup> 同上、4 頁。

<sup>11</sup> 同上、5-6 頁。



場を共有し、ともに作り上げることができるか、という課題、さらにはそのひとつの解決策として、チラシのデザインに反映させるという一連の議論の過程が書かれている。この議論の過程は、ジェンダー学習を構築していく具体的なプロセスそのものだといえる。さらに、こうした議論の過程を記すことにより、次年度の実行委員は、報告書を読みワークショップをおこなう上で、なにを考えるべきか、またどのような解決策があり得るのかを知ることができる。

2 点目の特徴は、「失敗」とおもわれるようなことも記述した点である。例えば、2017 年度の西早稲田キャンパスで実施された何カフェには参加者が集まらなかったが、その際、実行委員同士でその要因をジェンダーと教育をめぐる課題として話し合った。その分析の結果、報告書には「理工キャンパスは [...] ジェンダーやセクシュアリティを学ぶ土壌が安定していない」<sup>12</sup>との見解が示されている。読み手には、参加者が集まらなかったというこの記述を、たんなる「失敗」の経験として捉えるのではなく、別の意味として解釈する可能性が開かれている。さらには、読み手自身が、ワークショップを実施する際にどのような環境や大学としての支援が必要なのかといった、大学におけるジェンダー学習をめぐる課題を考察する契機となっている。

次に、「ワークショップへの関わり」は報告書のなかでも際立って重要な部分である。ここには、ジェンダーについて学ぶ根本的な原理が示されているように思われる。「ワークショップへの関わり」のなかには、どのような立場で関わっているのか、あるいは委員の個人的経験が克明に記されている。この点は、本ワークショップがジェンダーやセクシュアリティをテーマとしている点を踏まえれば、きわめて重要なように思われる。というのも、ジェンダーを学習する際に、個人の固有の経験から問いを発することが考察の出発点となり契機となりえるからだ。報告書のこの箇所からは、各個人それぞれ、興味関心や、何を問題と思うのが記されている。しかし、同時に、実行委員会やワークショッ

---

<sup>12</sup> 幕内涼平、矢内琴江「「何カフェ!?!」実践 当日の様子」、『2017 年度』、22 頁。

プでの議論の内容を自分には関係のない問題として捉えたり、当事者意識をもたないまま関り続けることはできないということが読みとれる。このジェンダー・ワークショップには、「知識」の有無や専門性、ないしはセクシュアル・マイノリティ「当事者」といった属性ではなく、自身のこれまで培ってきた多様な経験を背景として固有の文脈を生きる個人として実行委員や参加者が関わっていることを示唆しているように思われる。その違いを抱えつつ、共に思索を重ね、学び合う場をいかにつくっていくのかという試行錯誤の記録が現れている。以下では、この試行錯誤の記録から、実行委員会のメンバーの様子と 5 年間の活動を振り返っていききたい。

### 3.5 年間の活動のリフレクション

#### (1) 実行委員会のメンバー

実行委員の学生たちのジェンダー・ワークショップ実行委員会への参加の経緯としては、次の 3 つの場合を挙げることが出来る。第一に教員からの声かけによる場合、第二に前年度のワークショップの参加者が実行委員になった場合、第三に実行委員からの誘いの場合である。

それでは、このように集まってきた学生たちは、どのような思いや関心を持って、実行委員会に参加したのだろうか。

多く聞かれたのが、大学でジェンダーを学び、研究していても、他の学生や院生に（時には教員にも）と「自分の問題意識を共有できる人がいない」<sup>13</sup>経験や、「普段、〔ジェンダーに関して〕自分の思っている違和感や疑問を気楽に話すことができる場所が少ない」<sup>14</sup>と感じていたことである。さらに、周りに理解してくれる人がいないため、一人で悩んでいる時期もあったという声も聴かれ

---

<sup>13</sup> 川口かしみ「実行委員会の参加を通して」、『2017 年度活動報告書』、34 頁。

<sup>14</sup> 金珠淵「理想の場所、貴重な経験」、『2017 年度活動報告書』、36 頁。

た<sup>15</sup>。こうしたジェンダー学習・研究に取り組む学部生・院生が、自身の学習・研究について共有できる環境がないこと、あるいは、ジェンダー・セクシュアリティについて他者と安心して話す状況がないこと、それによって、疎外感や孤立感を経験してきたということは、深刻な問題として受け止めたい。

また、学生の中には、留学を経験しそこでジェンダーやセクシュアリティを学んだり、多様性が当たり前の雰囲気を経験し、日本では依然としてジェンダーやセクシュアリティに対する理解が広まっていないのではないかと不安を覚えて、この取り組みに関わった学生もいる。

そして、必ずしもジェンダー学習・研究に関心があったわけではないが、自分の経験の中にあるジェンダー問題や、様々な生きづらさの問題を考えたいと思って参加した学生もいる。

以上のように、集まってきた実行委員の学生・院生たちは、ジェンダーやセクシュアリティについて学んだり、それに関わる活動を行っている学生だけではなく、自分自身の経験や関心とジェンダー問題につながりを見出し参加してきた学生もあり、ジェンダーに関する「知識」をみんなが同じように持っていたというわけではない。実行委員会は、学部 1 年生から博士課程の大学院生まで、また日本人学生も留学生もあり、多様なメンバーで構成されている。

## (2) メンバーにとっての実行委員会の意味

こうした学生たちの置かれた問題状況と向き合っていくために、まずは互いの普段考えていること、疑問に思っていること、違和感を覚えていることを聴き合い、語り合うことの出来る「安心」して話し合える場が重要となってくる。ここで、2014 年度に参加した渡邊萌香が、「安心した学びの環境」<sup>16</sup>（下線部の強調は筆者）と述べていることは重要であろう。これを、別の言葉で渡邊は、「異

---

<sup>15</sup> 鄧曉宇「「何カフェ」との出会い—実践からの学び」、『2017 年度活動報告書』、38 頁。

<sup>16</sup> 渡邊萌香「多様な価値観の中で、ともに考え・つくること」、『2014 年度』、37 頁。

なる価値観に触れ、他者の存在を認めるといった新たな気付きに出会える場」と表現している。この場は、単に、“おしゃべり”の場であったり、個々人の“癒し”の場なのではなかった。問題を問題として捉えられていない問題状況の中で、個々人が分断されて孤立化されている状態から、自身の言葉が受け止められたり、目の前の他者の言葉を受け止める経験をする。その経験の中で自身の見方を広げていき、他者の価値観を尊重する自らを形成するとともに、そのような場を創っていく主体として自らを認識していく「学び」の場であったのである。

また、2017年度に4年生で関わった幕内涼平は、大学を卒業した後の自身を見据えて、今後も「このような居場所を作ったり、探したりしながらこれからも自分は生きていくのだと思う」<sup>17</sup>と述べている。こうした言葉から、ジェンダー・ワークショップを作っていく経験は、ジェンダーやセクシュアリティの問題について考えることを出発点として、「さまざまな視点、さまざまな背景から寄り添い、共感し、一緒に考え、悩む」<sup>18</sup>場を、この社会の中に創っていく主体を形成する営みであったと捉えることが出来るだろう。

さらに、このような社会を構築する創造的な主体として自己形成する営みを、実行委員の学部生や院生自身が、互いに学び合う関係を構築しながら生み出してきたということを強調したい。参加した学生たちの中には、自らの「モヤモヤ」や「不安」が解きほぐされていったときに、そこには自身の言葉を聴き受け止めてくれる他者の存在があったと語っている者もいる。また幕内は「仲間」のもつ「エネルギー」に「希望と可能性」を感じてきたと述べている<sup>19</sup>。このように、実行委員会やワークショップという場には、「実践的にジェンダーを学ぶ場」<sup>20</sup>、「安心して自由に語り合うことのできる学びの場」<sup>21</sup>、「社会を変えていく

---

<sup>17</sup> 幕内涼平「声にできる、形にできる自分の居場所」、『2017年度』、42頁。

<sup>18</sup> 同上。

<sup>19</sup> 同上。

<sup>20</sup> 例えば、安野直「ジェンダーを語ること」、『2014年度』、40頁；逸村理子「「場」の重要性と「当事者とは誰か」、『2015年度』、19頁。

<sup>21</sup> 例えば、北川莉夏「ワークショップにかかわって」、『2015年度』、22頁；金珠淵「理想の場所、貴重な経験」、『2016年度』、36頁。

ことにつながる場」<sup>22</sup>などの意味を、実行委員会のメンバー自身が見出してきた。この意味は、メンバー自身の互いに学び合う関係を通して生み出されてきたと言えるだろう。

### (3) 5年間に共通する視点と方法

毎年、集まる実行委員の状況、実行委員会自体の置かれている状況は異なっており、それに応じてワークショップの実施方法や内容も変化してきた。しかし、この5年間には、通底する視点と姿勢を見出すことが出来る。

第一は、一人ひとりの背景、経験、思いを尊重する視点である。それは、言い換えれば、私たち一人ひとりの経験の中に、ジェンダーやセクシュアリティの問題を他者とともに考え合うための知があると捉える視点だと言える。その視点は、実行委員どうしやワークショップの参加者たちと、互いの言葉を丁寧に聴き合い・語り合うことを大事にした話し合いや、ワークショップづくりに反映されている。

第二は、当事者として捉える視点である。実行委員や参加者が語る言葉を、個人の問題、自分とは関係のない問題として捉えるのではなく、自身に関わっている、共に考えるべき問題として取り組んできたことである。

第三に、一つの正解を出すのではなく、論点を出し尽くす話し合いを大事にする姿勢である。ジェンダーやセクシュアリティをめぐる問題についての答えを出すことは不可能である。例えば2015年度のテーマ・トーク後のフリー・トークでは3つのテーマが相互に関連し合っていることが明らかになり、2016年度のダイバーシティ・マップづくりでは、トイレの写真一つとっても、一つの角度からだけでは問題を語りきることが出来ないことを経験した。2017年度の「何!?カフェ」でも、セリフの意味の捉え方には実行委員内でも様々なものがあり、2018年度のポスター発表づくりでも、ドラマの評価に関して、例えば

---

<sup>22</sup> 例えば、小林航「イベントづくりにあたって」、『2015年度』、23頁；幕内涼平「声にできる、形にできる自分の居場所」、『2017年度』、42頁。

ジェンダーについて考えたことのなかった人の立場と、セクシュアル・マイノリティの立場とでは、ドラマの捉え方は全く異なっていた。どの捉え方が正解なのかということを求めるのではなく、正解がない問題であるということ、実行委員自身が経験することにより、答えを出すことよりも、互いの視点の違いや共通点を丁寧に話し合うことが重視されてきたのではないか。

次に、この5年間わたしが、こうした視点と姿勢に支えられながら、一貫して取ってきた方法について述べる。

第一に、実行委員自身が自分たちの関心や経験、学生生活や日常生活の中で抱いてきた疑問、違和感、憤りなどを聴き合い・語り合うということである。

第二に、実行委員自身の経験や考えてきたことを、共同で名づけてきたことである。例えば、2014年度の場合には第2回フォト・ウォーキングのための準備において実行委員自身が学内を写真撮影し、撮影した理由などを言語化した。また、2015年度の場合には「テーマ・トーク」として、実行委員自身の関心がワークショップの話し合いのテーマとなった。さらに、この名づけの作業がより意識的に行われ、かつワークショップづくりにおいて重要な意味を成していたのは、2016年度のダイバーシティ・マップづくりにおける、「パワポ写真」づくり（撮影した写真の理由の言語化）である。また、2017年度の「セリフ」づくり（チラシに掲載する、日常におけるジェンダーやセクシュアリティをめぐる疑問や違和感、思いをセリフ形式で言語化）、2018年度のポスター発表準備における「問い」の言葉の吟味である（実行委員会での議論の内容を疑問文で提示するポスターづくり）。このような名づけの作業は、実行委員一人ひとりの経験や抱えてきた思いを、個別のものとして捉えるのではなく、共通の問題として捉え直していく過程であった。そして、それによって、問題として捉えられてこなかった事柄を、問題として可視化する作業でもあった。

第三に、このように実行委員自身がワークショップやイベントの準備過程の中で取り組んできた、経験や思いの共有、そして名づけの作業そのものを、ワークショップの内容と運営方法に転化させていったことである。例えば、2014

年度の場合には、第2回「フォト・ウォーキング」の写真が、第3回「学生ミーティング」での話し合いの手がかりとなっていた。2015年度の場合には、実行委員会の中での様々な話し合いの内容が、「テーマ・トーク」として企画・実施された。2016年度の場合は、実行委員自身がフォト・ウォーキングを繰り返し行い、ワークショップを実施し、さらに自分たちが一つ一つの写真から読み取ることの出来る問題を丁寧に話し合った経験から、国際シンポジウムのプレ企画でも、単に自分たちの取組みを発表するだけではなく、会場の参加者とともにディスカッションし、より様々な角度から学内のダイバーシティのあり方を検討し合うことを試みた。2017年度の場合は、セリフが参加者の「何」を引き出す素材として生かされ、参加者どうしが互いに普段考えていることや疑問に思っていることなどを考え合う話し合いが可能になった。

以上のような方法は、実行委員会が予め計画したものではなかった。それは、互いの経験を聴き合い・語り合うことを通して、共有された問題にどのようにアプローチしていくのか、様々な参加者たちとともに考えていくためにはどのような方法をとることができるのかを模索し探究することで創られた。こうした方法を探究する上で、コーディネーターである矢内は、専門にしている、社会教育、フェミニズム、意識化などのアプローチに基づいた提案を行ってきた。以上の探究のプロセスは、上述の視点と姿勢を基盤とすることによって、ジェンダーやセクシュアリティをめぐる、自分たちが経験してきた生きづらさや孤独を超えて、誰かとともに考え合う方法、ひいては他者とともに生きていく方法の探求だったと言えるのではないだろうか。

#### (4) ジェンダー学習の構造

本節では、学習プロセスの構造について説明したい。まず、ここには相互に関わり合う2つのプロセスがある。一つは、実行委員自身の問題状況に対する気づきから、学習を組織していく主体として自己形成していく、実行委員自身の主体形成のプロセスである。もう一つは、実行委員会において、問題状況を

共同で分析し、この問題を打開していく術を共同で模索していく探究によって、コミュニティが形成されていくプロセスである。この二つは、相互に関係合いながら、ジェンダー・ワークショップという活動を創り出し、持続させてきた学習プロセスとして描写することが可能であろう。このプロセスが形成される基盤には、初年度と2年目に実行委員会が経験した、まずは実行委員自身が自分たちの経験や思いを聴き合い・語り合う営みがある。この営みを土台にしながら、ワークショップの内容や方法が設定されることとなった。そして、3年目のダイバーシティ・マップづくり、4年目の何カフェ、5年目のポスター発表では、キャンパスの構造やその写真を見ること・話し合うこと、セリフづくり、問いの吟味などを経ながら、実行委員自身が見えなくされてきた問題に名づける作業を通して、問題に気がついていく。

さらに、この名づける作業を通して、ワークショップという学びの場を組織していく。このワークショップは、参加者とともに、これまで看過されてきた問題を照らし出し合い考え合う共同の学びの場として創り出される。そして、この実践を、実行委員会では共同で省察し、『活動報告書』としてその活動内容、意味、価値、そして実行委員一人ひとりの学習を記録したのである。このように、ジェンダー・ワークショップづくりは、実行委員自身の主体形成と、実行委員会というコミュニティの形成・展開プロセスが絡まり合っており、実行委員会ごとに、経験の言語化－実験（実行委員会における名付け作業）－実践－実践の省察－実践の記録化（『活動報告書』）という仕組みを内包した螺旋状に発展していた。このプロセスは活動報告書とさらには後述するコーディネーター・チームの存在によってつながり合っており、5年間全体の活動が螺旋状に展開する重層構造をもつ学習プロセスであった。

このような学習プロセスを、改めてジェンダーを学ぶという文脈の中で捉え返したい。この実行委員会に集まってきた学生たちの多くが、ジェンダーやセクシュアリティを研究したり、関心を持ったり、疑問をもっていた。だが、ジェンダー関連以外の授業や学生生活の中では、その関心や疑問を誰かと話し合



うことが出来なかったり、話すことに不安を覚えてきたと発言している。これは、場合によっては、こうした学生の疎外や孤立化にもつながってきた。このことは、性の問題をタブー視する社会状況や、さらにはアカデミズムの中で、ジェンダー・スタディーズ、女性学、クィア・スタディーズなどの人間の性に関わる学問が、今なお過小評価され周縁化されていることに起因すると考えられる。しかし、大学教育に焦点化して、この疎外や孤立化の問題を捉えるならば、それは、すべての学部生・院生にとって、ジェンダーやセクシュアリティについて、またはそれを出発点として、人間の生き方、学問のあり方、社会や文化のあり方を、他者とともに自由に議論し合うことを通して、社会や文化を創造する主体として自己を形成していきながら、他者とともに学び合う関係を構築していく権利そのものが奪われている問題として考えることができる。

いま一度、こうした問題状況に照らしたとき、5年間を通して実行委員会が作り出してきたジェンダー学習とはどのようなものだったのか。それは、学生たち自身が、ジェンダーやセクシュアリティなどをめぐる互いの経験や思いなどを聴き合い・語り合うことを通して、問題状況として描写し、この状況を構成する権力の諸構造を読み解いていきながら、自らの経験した疎外や孤独、あるいは生きづらさを超えて、この問題を他者とともに考え合う術を探究し、考え合う場を創り出していくものだった。すなわち、学生自身が、ジェンダーという知の権力構造を組み替える新たな方法を生み出し実践していくジェンダー学習であると言える。

## おわりに

本稿では、まず、実行委員会が発行している『活動報告書』をもとに、実行委員どうしが互いに学び合う関係を構築していったプロセスと、ワークショップづくりを通じたジェンダー学習の展開のプロセスを跡づけてきた。実行委員会が創造してきたジェンダー学習の相互関係的な二重構造と持続性を支えてき

たものに、『活動報告書』による実践の記録化がある。この報告書作成がジェンダーワークショップのなかで果たした役割は、4つに分けられる。

第一に、一年間の取り組みの軌跡を詳細に記録することにより、次年度以降ワークショップを開催する際の指針となりえること、またワークショップで話し合われた参加者の声を文章として残せること——すなわち共同・共働により生み出された、知の集積がなされる点だ。実行委員のひとりである幕内涼平が「ジェンダーワークショップの発展に向けて『繋がり』と『継続』がキーワードにあげられる」<sup>23</sup>と自覚的に記しているように、この取り組みはわたしたち自身が学ぶ大学内の課題や気づきを、省察的に学ぶ場所であり、単年度で完結するものではもちろんない。したがって、報告書には継続的な学習をおこなっていく際の、支柱としての役割がある。

第二に、報告書執筆の過程において、内省や実行委員同士のあいだでの対話により、ワークショップにあらたな意味づけをおこない、学びを深めることができる点、ひいてはジェンダー学習へ向けて問いを発する契機となりえる点が挙げられる。

第三に、さらには報告書作成の過程のなかで、この取り組みが私的な交流やアジュールではなく、大学という公的な場における学習であるという意識が醸成される機能である。ジェンダーやセクシュアリティに関する疑問を経験する場は、他にもサークルなどがある。しかしながらこの取り組みは、経験の共有の場であるのみならず、性をめぐる権力構造について批判的に検討・組み換え、新たな知を創出するところでもある。報告書作成では、実践を振り返り、言語化し、さらには言語化されたことばの意味を吟味する。つまり報告書の作成とは、実行委員ひとりひとりが主体的にワークショップに関わり、知の創出の主体であることにたいして自覚的になっていくことである。実際の話し合いの場では、聞き役に徹していたり、戸惑いながら参加する学生もいて、必ずしもワークシ

---

<sup>23</sup> 幕内「1.ワークショップ概要」、『2017年度』、12頁。

ヨップを作る主体として自覚していない場合もある。しかしながら文章にすることは、自身の実践や経験、他者との関係を捉え返すことになり、ジェンダー学習を構築していく主体としての自己が立ち上がることになるのである。

以上により、実践の記録化は、まさにこの二重構造を構築していくプロセスを具体的に描写し、そして継続的な記録化によって、この持続性が可視化されてきた。すなわち、実践の継続的な記録化は、学生たちが中心となって、他者との関係を再構築してきた学習プロセスを明らかにすることを通して、大学教育の場に構造化された権力の諸関係が組み換えられていく道程を公的に示す営みであると言えよう。そこでは、専門的知識の受信者としての学生ではなく、学生自身がジェンダーやセクシュアリティをめぐる課題を明らかにし、その課題と対峙し、性をめぐる権力の諸関係を組み替えていく手立てを明らかにしていく、知の創造の主体としての姿が浮き彫りになっている。そのことは、学生もまた大学という教育・研究組織を構築する主体であることを示すとともに、ジェンダー学習は、教室という限られた空間を超えて、社会を構成する一組織のあり方を問い、組み替えていく主体を形成する可能性を有するものであることも示している。

以上をふまえて、大学教育において、学生が中心となって考え合い、共同で実践を創造するジェンダー学習を実現する意義とは、ジェンダーやセクシュアリティなどの視点から組織、さらには社会を変革していくための主体を形成していく教育的意義と、実践を通して性の社会的諸関係を組み替えていく新たな知を創出していくことにより、ジェンダーやセクシュアリティ研究の新たな地平を切り開く学問的意義の両面があると言えるのではないか。

## 『活動報告書』一覧

早稲田大学ジェンダー研究所(2015)『2014年度グローバル・エデュケーション・センター設置全学共通副専攻「ジェンダー研究」学生参加型ワークショップ開催報告書』

学生参加型ワークショップ実行委員会／ジェンダー研究所（2016）『2015 年度グローバル・エデュケーション・センター設置全学共通副専攻「ジェンダー研究」ワークショップ開催報告書』

ジェンダー・ワークショップ実行委員会／ジェンダー研究所（2017）『2016 年度グローバル・エデュケーション・センター設置全学共通副専攻「ジェンダー研究」全体活動ワークショップ活動報告書』

ジェンダー・ワークショップ実行委員会／ジェンダー研究所（2018）『2017 年度グローバル・エデュケーション・センター設置全学共通副専攻「ジェンダー研究」全体活動ワークショップ活動報告書ー「何!?カフェ」実践報告ー』